

ヴィトゲンシュタインの思想を 理解するために

山口 勲

〔1〕

近年ヴィトゲンシュタインの研究は、英米の講壇哲学界で下火になってきた、という記事¹⁾を読んだのは、1975年のことである。また1976年の3月末に、カナダで催されたヴィトゲンシュタイン死後25周年記念会議の様態を伝える記事²⁾は、英語圏でのヴィトゲンシュタイン研究者の有様をうかがわせて、実に印象的であった。わずか二頁の記事は、直接ヴィトゲンシュタインを知る人々の思い出話はともかく、研究を発表した人々の局部的、分断的、技術的な研究の陳腐、低調、行き詰りに対する焦立ちを伝えている。この記事を書いた人自身も、この大会で「ヴィトゲンシュタインのラッセルタイプ理論批判」というテーマの発表をしながら、次のように書いている。

あれ程、伝記的な探索を拒否したヴィトゲンシュタイン。その哲学に影響されたと信ずる人々の集まりなのに、ややもすると教祖に対する様々な憑かれた態度を取り、或はヴィトゲンシュタインの書いた文章をお経の文句の様に繰り返し、肝心の問題点に苦しむこともなく、古文書の様に細かく詮索する。私も参加者として、茶番の一部を演じているわけだと考えざるを得なかった。

もし英米の講壇哲学界の動向が、このようなスナップである程度グローバルに捉えられるとすれば、それはヴィトゲンシュタインの思想を、在来の英語圏

の哲学的関心，という背景で理解してきた指向のある時期での成功（分析哲学）とその限界を暗示してはいないだろうか。

研究対象の理解に限界と行き詰まりを感じる時、我々はこの対象を基本から捉え直す必要に迫られる。そして在来の英語圏からの解釈では読み落されていた問題点を、新たな文脈の中へ読み込み、ヴィトゲンシュタインの思想像を描き直す努力をしなければならない。我々は、ヴィトゲンシュタインに対する在来の英語圏からの解釈³⁾を、ケムブリッジ指向型と名付け、我々の提起する視座は、ウィーン指向型と呼ぶことにする。この小論は、このウィーン指向型を求める大担で大雑っぱなデッサンにすぎない。

[2]

ヴィトゲンシュタインはウィーン生まれのオーストリア系ユダヤ人^{4:186)}であり、ウィーンを中心とするオーストリア・ドイツ語文化圏に生活と思想の基盤をもっていた。そして彼は《論理哲学論考》を、オーストリア・ハンガリー二重帝国下の、ハプスブルク王朝の最期の約30年間を体験しながら完成している。ただしこう書くことさえ、ケムブリッジ指向という視点からヴィトゲンシュタインを読む人々は、すでに奇異と思うことであろう。

1) ヴィトゲンシュタインは、1906年、数学と自然科学に力を注ぐリンツの実科学校を卒業している。当時のオーストリアで自然科学を専攻する学徒にとって、L・ボルツマンの熱力学やH・ヘルツの「力学の原理」を修得することは、最大の関心事であろう。ヴィトゲンシュタインも実科学校卒業後、ボルツマンの下で物理学を研究する希望をもっていたし、また彼がヘルツの力学に精通し、生涯ヘルツに忠誠と称賛を示していたことは知られている。彼が力学の言語、モデルとしての言語に関心をもつ下地は、この当時すでにあったのである。

だがボルツマンに師事する希望は、彼の自殺（1906）によって果せなかった。それでヴィトゲンシュタインは止むをえず、ベルリンの工科大学で機械工学を専攻する。この研究の興味から、1908年に英国へ渡り、夏にはダービシャ

ーの上層気象観測所で凧を飛ばす実験をし、秋にはマンチェスター大学工学部の研究生となり、航空工学の研究にはげむ。そして彼の関心がエンジンの研究からプロペラの設計へと進むにつれ、彼の研究分野も工学から純粋数学へ、そして数学基礎論へと移ってゆく。この外的行動が、リンツ（オーストリア）、ベルリン（ドイツ）、マンチェスター（イギリス）という移動となって現われたが、この行動半経は、物理学の知識に才けたエンジニアとして出発したウィーン人、ヴィトゲンシュタインの関心のおもむく展開であった。

ところが、1911年、ヴィトゲンシュタインは今後の研究方向の助言をうるため、イエナにフレーゲを訪ね、ラッセルの下で数理論理学を学ぶようにすすめられる。こうして彼のケムブリッジ行きは決まり、彼は1912年に渡英し、ラッセルの下で研究と共同討議をし、ムーアの講義にも出席することになる。そして彼らを通じて英語を話すアカデミックな哲学者たちに紹介され、こうしてヴィトゲンシュタインは、ケムブリッジ指向の天才的哲学者として迎えられてゆくのである。

しかし我々は、その後ヴィトゲンシュタインがケムブリッジとどんな関り合いをもったかを念頭におきながら、とり合えず次の三点を指摘しておくことにする。

(i) ラッセルはすでに、1903年、《数学の原理》を著わし、ホワイトヘッドとの共著、《数学原理》(1910-1913)を公刊しつつあった。フレーゲが数学基礎論に関心をもつ者に、ラッセルの指導を助言するのは当然の成り行きであったろう。

(ii) ヴィトゲンシュタインはこのケムブリッジ行きによって、ボルツマンやヘルツの力学言語を論理学の言語に仕上げ、問題を解明するための〈概念の分析用具〉を研ぎ澄ます修練を積んだのである。

(iii) ヴィトゲンシュタインがケムブリッジに滞在したのは、1912-1913年の学期であり、〈修練〉が終るとすぐウィーンへ戻っている。そして以降1929年まで、ケインズに招かれた1925年の短かい時期を除き、彼はケムブリッジの地を踏んでいないのである。

2) ヴィトゲンシュタインは第一次世界大戦(1914.7.28)が始まると、翌月(8.7)にはオーストリア・ハンガリー軍に志願し、1919年8月に復員するまで軍隊生活を送っている。彼はこの軍隊志願を、自殺の一方法を探すためだとも語っているが、戦争の危険な生活のことに關しては友人に何もいってない^{5:15)}。むしろ兵士であることが、〈命題〉を考える妨げになるとみる配慮は間違っている、と述べている⁶⁾。

しかもこの軍務中の1914年に、F・フィッカーの紹介で、ウィーンの誇る最大の建築家、A・ロースと出逢い、1916年にはロースの弟子、P・エンゲルマンと知り合っている。この人々の思想には、驚異的なウィーン文化圏の思想集団が結びついているのだ。当時のウィーンに住む知識人ならば、このA・ロースの思想、インスブルックで刊行されたフィッカーの雑誌「ブレンナー」(Brenner)、ウィーン最大の批評家・風刺家、K・クラウスの発刊する雑誌「ファッケル」(Fackel)、今世紀最大の音楽家、A・シェーンベルク、その他あまたの傑出した思想家群の影響を無視できない⁷⁾。ヴィトゲンシュタインをケムブリッジ指向とみなすと、彼がウィーンで受けた彼らの思想的影響は全く度外視される⁸⁾。

ヴィトゲンシュタインは、この思想的背景を担って戦争に従軍している。彼は戦場に身を挺することによって、何事かを賭けていたのである。そしてこの予想を裏書きするかのように、彼は軍務中、後に《草稿1914-1916》として公けにされる二つの研究ノート、「1914. 8. 9-1915. 6. 22」と「1916. 4. 14-1916. 5. 10」を残している。この思索の成果はやがて、1918年に、《論理哲学論考》として完成するのである。

我々は《論考》が、オーストリア・ハンガリー二重帝国下の、ハプスブルク王朝の存亡を賭けた苛酷な戦争体験の中で、しかも戦争の冷厳・単純・苛酷さと、デカルト的純粹思考の奇怪な二重写しの思索体験の中で、仕上げられたものであることに注目しなければならない。

3) 《論考》は最初、この原稿のできた年(1918)にウィーンのヤホダ・ジーゲル社へ依頼したが、紙・印刷・装丁の費用をもつことを条件とされたため

に断念している。次いでL・フィッカーやリルケの努力で、ドイツのインゼルやオットー・ライヒェル社と交渉したが失敗している。ラッセルの紹介文付きでレクラム社から出版する計画もあったが、ヴィトゲンシュタインがラッセルの紹介文に強い不満を示したために実らなかった。その後ケムブリッジ大学出版会への交渉も行われたが、1921年1月、出版企画は却下されている。次いで同年2月に、W・オストワルトが《論考》の出版を承諾し、秋にようやく、オストワルト編集の「自然哲学年鑑」に掲載されたのである。また1922年には、ケガン・ボール社から、C・K・オグデンとF・P・ラムゼイの英訳付きの、独英対照版として公刊された。この《論考》の独語版と独英版には、共にラッセルの解説が付いている。掲載および出版は、ラッセルの紹介文付きを条件として許可されたのである。

我々は以上の経過から、ヴィトゲンシュタインは《論考》の出版が英国で行われ、この書物が英語圏で主に論議されることを、必ずしも当初から意図していたわけでないことに気付く。しかも彼は、ラッセルの解説文に強い不満を表明しつつ、出版のため止むをえずこの解説文の掲載に同意したのである。

4) ところがヴィトゲンシュタインは、ラッセルの解説文には不満でありながら、《論考》の序文では、自分の思索に刺激を与えてくれた人として、ラッセルとフレーゲの名を挙げている。もし哲学に対するヴィトゲンシュタインの関心は、ラッセルとフレーゲの数理論理学、次いでラッセルとムーアの認識論と言語分析に接触したことで目ざめたという、ケムブリッジ指向型の平均的意見に従えば³⁾、彼はこれらの人々の理論にすばらしい修正を施し、英国哲学界を前進させた人、という評価を受ける。この見方は、ラッセルが《論考》を解説・批評する標準でもあろう。

しかしそうなると、なぜヴィトゲンシュタインはラッセルの解説を拒けようとしたのか。それなのに、なぜ彼は〈序文〉ではラッセルに感謝するのか。我々はこの二つの疑問を、次のように交通整理しなければ理解できないであろう。

ヴィトゲンシュタインがケムブリッジへ行ったのは、〈概念の分析用具〉を

研ぎ澄ますための修練であり、彼はこのための思索に刺激を与えてくれた人として、ラッセルに感謝しているのである。これに対し彼がラッセルの解説を不満としたのは、《論考》に対する専門的技術的見解の差異でなく、この本を書いたヴィトゲンシュタインと、この本を読むラッセルとの〈世界観の相違〉に根をもっていることなのである。

5) ヴィトゲンシュタインとラッセルの見解の相違は、分析用具にあるのではなく、世界観に根ざしたものであるとすれば、ほぼ同じ時期に書かれた二人の次の引用文は、両者の見解の相違がいかなるものであるかを明かにするであろう。

ラッセルは、1918年に、《論理的原子論の哲学》⁹⁾を公刊しているが、その序文で書いている。「私はこれらの発想を、私の友人にしてかつての弟子、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインから学んだのである。」またラッセルは、1920年に書いた《論考》の解説文を、「誠実な哲学者なら誰でも、本書を無視できない」と結んでいる。

これに対しヴィトゲンシュタインは、1919年の9月か10月頃に、L・フィッカーへ宛た手紙^{5:143)}で、《論考》の意図を端的に、「この本の問題点は、倫理的なものである」と明言している¹⁰⁾。

それゆえ我々は、ヴィトゲンシュタインがラッセルの解説に不満を表明したことを卒直に受け取る。そして、ヴィトゲンシュタインはすでに自分の側に、明確な哲学的問題を懐いていて、むしろ逆に、ラッセルやフレーゲの分析的方法を同時代的共有財として、概念の分析用具に利用しつつ、彼自身の秘める問題の解決を計ろうとしていた、というふうに考えるのである。

[3]

1918年、第一次世界大戦は終結し、約700年間オーストリアを統治してきたハプスブルク王朝は崩壊する。そしてオーストリア共和国が成立した。しかし1920年代の新オーストリア共和国は、ドイツと共にヴェルサイユ条約下の極度の不安と困乱に喘ぎ、この中から出現したナチズムの脅威にさらされていた。

そして1930年代には、ヒットラーが覇権（1930）を握るドイツの圧力、独逸の合併（1938）と追い込まれてゆく。この過程の中で、ヴィトゲンシュタインは1920年代を思想の模索と探求に捧げ、1929年からは再度ケムブリッジで、概念用具の探求と解明を始める。そして1936年に《哲学研究》を準備、1945年にその第一部をほぼ完成するのである。ただしこう書くことは、ケムブリッジ指向型の人々には、すでに奇異に思えることであろう。

1) ヴィトゲンシュタインが英国に滞在した期間は、それほど長くないし、彼は英国にそれほど深い関心を示していなかった、といえ人々は驚くかも知れない。パートリによると^{4:22-25}、ヴィトゲンシュタインが英国に滞在した期間は、1908年から1937年の間に、全体でおよそ7年半、第二次世界大戦の前と間と後の、止むをえず（独逸合併と第二次世界大戦）英国に帰化し、留まらざるをえなかった期間（1938-1946）の9年間、それと1947年から死ぬ年まで（1951）の間にわずか21か月である。しかも、年3回ケムブリッジで行われる講義週間は、すべて8週間の長さで、彼は各学期の前後数日以上ケムブリッジに留まっていることは稀であり、毎年25週ないし26週間は、主にウィーンやその他のオーストリアの地で過ごしていたのである。

従って、我々は《論考》を書く前のケムブリッジ行きと、《研究》を書く前のケムブリッジ行きとの間に、何か共通したヴィトゲンシュタインの意図を読みとることができる。ヴィトゲンシュタインが自分の意思で再度ケムブリッジに踏み留まった期間は、1929年から1937年までで、独逸合併がなければ、彼はウィーンに戻っていたことが予想されるからである。

2) ヴィトゲンシュタインが、ラッセル、ムーア、ケインズに宛た手紙⁶⁾が公刊されている。ラッセル宛の手紙は57通あるが、分類すると時期的にはっきり三つのグループに分れるのは面白い。第一群（32通）は1912-1915年、第二群（21通）は1919-1920年、第三群（4通）は1929-1935年である。このうち、第一群の1912-1913年の文通はケムブリッジ滞在期間で、1914-1915年の文通は留学中の余波とみなせる。また第二群の文通は、《論考》出版にまつわる余波とみなせる。

するとこの各文通期間は、ヴィトゲンシュタインをケムブリッジ指向として捉える見方にほぼ対応していることになる。もしそうならば、我々はヴィトゲンシュタインの生活行動と思想形成の所在を、逆にラッセルとの交渉のなかった時期、いわば空白期に焦点を合せて捉えてみることができよう。この視点の転換は、ヴィトゲンシュタインの思想を、ケムブリッジ指向からウィーン指向へと、いわば「コペルニクス的転換」をして解明する重要な意味をもっている。

3) 第一空白期は、原空白期ともいえるもので、1889-1911年である。すなわち、ヴィトゲンシュタインの誕生した年からラッセルと文通する前年までである。この期間は、ヴィトゲンシュタインの思想の原体験を育んだウィーン文化圏を解明せねばならぬ最重要な時期である。

ケムブリッジでヴィトゲンシュタインを取り巻いた雰囲気は、ケインズが「若き日の信条」¹¹⁾で最も的確に描くブルームズベリの思想である。このグループは、ムーアを盟主とし、ヴィクトリア王朝の偽善に反逆する。その武器は、ムーアが「倫理学原理」(1903)で明かにした「分析的方法」である。ムーアは、偽善の根源を、事実語と価値語の混同にあると考え、分析的方法を用いて両者の俊別を計ろうとする。この冷徹なメタ倫理学的方法は、ブルームズベリの知的中産階層を支える旗印であった¹²⁾。

これに対し、ウィーンでヴィトゲンシュタインを取り囲んでいた雰囲気は、S・ツヴァイクが「昨日の世界」¹³⁾で最も端的に描くウィーン文化圏の思想である。この集団は、ウィーン最大の批評家・風刺家、K・クラウスを盟主とし、ハプスブルク王朝の偽善に反逆する。その武器は、事実の領域と価値の領域とを分離する「創造的分離者」(Creative separators)^{5:31)}の思想である。この実践的行為による言語の創造的分離の方法が、ウィーンの知的中産階層に大きな影響力を与えていたのである⁸⁾。

従って、ムーア・グループとクラウス・グループとは、共に事実と価値の言語を俊別する方法をとることによって、一面ヴィクトリア王朝とハプスブルク王朝にそれぞれ対決する時代的共時性と方法的共通性をもつ。しかし他面、各

王朝の歴史的文化的時代背景と、それに対決する分析用具の使い方、切り込み方の差異を無視してはならない。共通性ととともに、この異質性を無視すると、我々は何故ヴィトゲンシュタインがケムブリッジに行き、分析哲学に大きな影響力与えたのか、それにもかかわらず何故ヴィトゲンシュタインは分析哲学に反撥し、〈逆説の人〉とならざるをえなかったのか、を洞察することはできない。《論考》の意図が倫理的なものであるといわれる場合、ヴィトゲンシュタインが分析用具を使って明かにする倫理学と、ムーアが分析用具を使って明かにした倫理学の背景が深く追求されねばならない。

そこでヴィトゲンシュタインのケムブリッジでの関心は、この共時性と共通性を利用して、やがて《論考》に仕上げられる概念の分析用具を修得するための技術的研究・修練・対話にあったこと、また彼が1929年以降、再度のケムブリッジ行きを決行した意図も、何か新たな概念用具を模索する必要に迫られたためではなかったろうか、とみるのが我々の理解の仕方なのである。

4) 第二空白期 (1914-1918) は、〔2〕の2) で述べた時期である。《論考》の完成は、第一次世界大戦の終結、ハプスブルク王朝の崩壊と時期を同じくしている。《論考》は、ハプスブルク王朝最期の約30年間における、K・クラウスを盟主とするウィーン文化集団の哲学的表現であるとみることができる。

すると、第三空白期 (1919-1928) のヴィトゲンシュタインは、《論考》後の、すなわちヴェルサイユ条約下の政治的、経済的、思想的不安定な新オーストリア共和国にあって、新たな倫理的条件を求め始めたとするべきであろう。ただしこの第三空白期の思索と体験が、どのようにして《哲学研究》に結実してゆくかを考察することは、ヴィトゲンシュタインをウィーン指向の思想家として理解してゆく上で非常に重要な研究領域であるが、それだけにまだ未踏の大きなテーマである。ここでは、ヴィトゲンシュタインの教育観を瞥見しておくに留める。

ヴィトゲンシュタインは、1919年9月、《論考》出版にまつわる接渉を続けている時期に、すでにウィーンの師範学校へ入学している。そして1920年7月に卒業すると、この年の9月から1926年の4月まで、低オーストリア地方の各

地（トラッテンバッハ、ハスバッハ、ブーフベルク、オッテルタール）で実際に教員生活を送っている。彼のこの教育実践活動を支える思想としては、ウィーン大学のO・グレッケルやK・ビューラーの影響が挙げられよう。

グレッケルは、古きオーストリアの消極的教育方法である *drilling schools of the Hapsburgs* に反対し、生徒が積極的に自分の課題に参加する *working school* の方法を主張し、新共和国の教育改革運動の提唱者であった^{4:91-92}。彼は個人的にヴィトゲンシュタイン家にも出入りしていた。このグレッケルに誘われてウィーン大学にきたビューラーは、ゲシュタルト心理学に近い立場をとる児童心理学者で、ヴィトゲンシュタインは彼から最も多くを学んだ一人であったとみられている^{4:145-148}。ヴィトゲンシュタインは彼らの教育思想を背景とし、旧オーストリアの教育方針に固まった親たちの手痛い反感を買いながら生徒の教育に励げんでいる。

実際にトラッテンバッハやオッテルタールで、ヴィトゲンシュタインに教わった生徒たちと面談できたバートリによると^{4:112-116}、ヴィトゲンシュタインは学校改革の原則として、自主活動の他に、統合的教育 (*integrated instruction*) を考えていた。この原則は、部分や要素を重んじつつ、これを全体にまとめ上げる方法をとるもので、彼はこの方法の活用によって、たとえば文法の用法を標準的実例からでなく、個々の特殊な方言的実例から始め、生徒の方言の多様性の中からその背後に原則を分らせるように勉めている。そしてこの方言の活用を生かした小学校生徒用の辞書を作っている。それでバートリは、村の生徒たちとの接触の中に、はやくも後期ヴィトゲンシュタインの思想を先取する問題、すなわち言語の学習、原始言語、そして私的言語の中心問題のいくつかがすでに深く埋め込まれていた、と考えている^{4:86}。

5) 同じ第三の空白期に、ヴィトゲンシュタインに、一方ではシュリックが、他方ではフレーゲが接触している。この接触の意味はどのように理解できるか。

1927年、シュリックはヴィトゲンシュタインの一番年下の姉マルガレーテ（ストーンボロウ夫人）の紹介で、初めてウィーンのストーンボロウ邸でヴィトゲン

シュタインと会い痛く感激した。以降、ヴィトゲンシュタインはヴァイスマン、カルナップ、ファイグル等とよく会合するようになる。ただし彼らは、《論考》の著者としてのヴィトゲンシュタインと語っているのである。なぜなら、ヴィトゲンシュタインはウィーンでボルツマンやヘルツの力学を修得し、渡英後はこの力学言語をラッセルとの共同討議の中で、論理学の言語に研ぎ澄ました。この言語の分析用具は、〈語ることのできる〉言語を扱い、《論考》の表面をなしている。確かに表面の分析用具にだけ関心を示せば、ヴィトゲンシュタインの哲学は徹底的に反形而上学的である哲学を自然科学と同一方法によって処理したとして、科学的世界把握をめざす論理実証主義の旗印になろう。しかしヴィトゲンシュタインの《論考》の意図は、フィッカー宛の手紙で示したように〈倫理的なもの〉であり、基本的に折り合う筈はないのである。

また1923年から1924年にかけて、F・ラムゼイがケムブリッジからブーフベルクやオッテルタールにヴィトゲンシュタインを幾度も訪れている。後にヴィトゲンシュタインは《哲学研究》の序文で、このラムゼイをP・スラッファーと共に自分の思想に対して下した批判のゆえに感謝している。しかし、彼が1929年、再びケムブリッジ行きを果し、ラッセルとムーアを口述試験の試験官とし、しかも《論考》によって学位を授かり、翌1930年にはトリニティ・コレッジのフェローとなってゆく過程を考えると、ヴィトゲンシュタインの《研究》とラムゼイやスラッファーの関係は、《論考》に対するラッセルやフレーゲの関係と同じではないか、とみられてくる。ヴィトゲンシュタインは、ラッセルの解説に不満を表明したことも明かなように、正当に理解されない、しかも第一次世界大戦終結前に仕上げた《論考》を携えて、なぜ再度ケムブリッジへ行ったのか。この相反する逆説的な意中を反映してか、この時期のラッセルへの手紙は、1929年に1通、1930年に1通、1935年に2通あるにすぎない。このことは、再度ケムブリッジ行きを果したヴィトゲンシュタインの狙いが、用意ならない〈逆説〉をこめていることを推察させるのである¹⁴⁾。

〔 4 〕

1929年以降、ヴィトゲンシュタインの《論考》における〈分析用具〉は、やがて《哲学研究》で明確に自覚される〈概念用具〉へ徐々に切り換えられてゆく。ヴィトゲンシュタインにとっても苦闘の時期であり、また彼を理解しようとする流派と錯綜する時期でもある。

1929年、彼はケムブリッジで「論理形式について」を発表し、「倫理学講話」を講演しながら、休暇中はウィーンに戻り、シュリックやヴァイスマンと討論している。このときの速記録は、《ヴィトゲンシュタインとウィーン学団》として後に公刊された。また1930年から始められた講義内容は、ムーアの《ヴィトゲンシュタインの講義 1930-33》となって後に公刊された。前の本はヴィトゲンシュタインを、自分たちの教祖とみなす論理実証主義者の速記録であり、後の本はヴィトゲンシュタインを、ケムブリッジ指向とみなす人によってまとめられた筆記ノートである。

このような経過の中で、1933年と1934年に、初めてヴィトゲンシュタイン自身による講義原稿が回覧される。この原稿は、後にそれぞれ《青色本》と《茶色本》といわれるようになったもので、この時期からようやく彼独自の新たな概念用具が自覚的に捉えられ始めたようである。

しかし、再度ケムブリッジ行きを果した彼の目的は、《論考》の場合と同じく、やがて《研究》に仕上げられる概念用具を研ぎ澄ますための技術的研究・修練・対話にあったのではないか。《研究》における概念用具に注目し、これを日常言語学派の骨格に組み込んでゆく人々と、同じ用具を使いながら、これらの人々と全く別なことを意図していたと思われるヴィトゲンシュタイン¹⁴⁾。このような対照的な予想を、我々は強めてゆかざるをえないのである。そして、もしこの〈逆説〉の見解にいくらかでも信憑性があるとすれば、概念用具に関する対話をしながらも、その用具を使う真の意図を、決して絶対に漏らそうとしない、打ち解けることのないヴィトゲンシュタインの内面性に、我々は彼のユダヤ性的特徴を窺える思いがするのである。

註

- 1) 《理想》1975年3月号 特集〈ヴィトゲンシュタイン〉の14頁。
- 2) 「二十五年の後」石黒英子 《ヴィトゲンシュタイン全集》の第五巻に挿入された〈月報8〉(1976.10)。大修館。
- 3) この解釈の代表例として、次の著書を挙げておく。
David Pears; Ludwig Wittgenstein, New York, The Viking Press, 1970.
- 4) Bartley III, W. W; Wittgenstein, T. B. Lippincott Company, Philadelphia and New York, 1973.
- 5) P. Engelman; Letters from Ludwig Wittgenstein with a Memoir, Basil Blackwell, Oxford, 1967.
- 6) Ludwig Wittgenstein; Letters to Rusell, Keynes and Moore, Basil Blackwell, Oxford, 1974.
- 7) 当時のウィーンの思想的雰囲気形成していたその他の人々。フロイト、ココシュカ、マッハ、グスタフ・マーラー、ホーフマンスタール、ローベルト・ムジル、フリッツ・マウトナー、シュニッツラー、シュテファン・ツヴァイク……等々。ヴィトゲンシュタイン自身は思想的影響を受けた人としてその他に、ショーペンハーワー、ワイニンガー、シュプレンガー、プロイアー、などを挙げている。この人たちとのヴィトゲンシュタインの関り方を考察することは重要である。ここでは、彼の影響の受け方は、新しい〈比喻〉を発見するためである、といっておこう。Ludwig Wittgenstein; Vermischte Bemerkungen, S. 43 参照, Basil Blackwell, Oxford, 1977.
- 8) 《ヴィトゲンシュタインのウィーン》の第三章と第四章。A・ジャニック, S・トゥールミン共著。TBSブリタニカ, 1978.
- 9) Rusell, B; The Philosophy of Logical Atomism, London, George Allen & Unwin Ltd, 1918.
- 10) この問題については、次の論文参照。
《言語論哲学の基礎を求めて》——ヴィトゲンシュタイン研究(I)——山口 勲
城西大学教養関係紀要 第2巻第一号(1978.3)所収。
- 11) 《若き日の信条》 世界の名著57 所収。中央公論社。
- 12) 《ケインズ思想》—〈若き日の信条〉を中心として—の〔2〕〈ケムブリッジ分析学派〉を参照。城西大学経済学会誌第7巻第3号(1972.3)所収。
- 13) 《昨日の世界》〈ツヴァイク全集〉20-21巻。みすず書房。
- 14) 《論理哲学論考》と《哲学研究》で、ヴィトゲンシュタインは二度に渡り、〈逆説〉をやったのけたのではないか、という大胆な発想については、次の論文を参照。
《発想の転換を求めて》——カフカとヴィトゲンシュタインの場合——の2) ヴィトゲンシュタインとウィーンおよび英国経験論。山口 勲 《私学研修》第78号

(1977.7) 所収。私学研修福祉会。

なお、英国にも、この点に気づき出したと思われる次の書物がある。すなわち、デカルトとヒュームのように全く異なった伝統に立つ哲学が、私的言語またはそれに非常に近い立場を認めていたのではないかということに気づき、この面でヴィトゲンシュタインの哲学が用意ならぬ問題を孕んでいることを指摘し、両方の伝統を徹底的に批判検討する必要を示唆している。

Anthony Kenny; Wittgenstein, pp.16-17, Havard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1973.